

一杯の牛乳

A glass of milk

内田 弘

Hiroshi Uchida

今から23年前の1983年の夏のことです。

当時、私の勤務していた日本電気硝子は共産圏の国々へガラス製造プラントを輸出し、食いつないでいた時のお話です。

モスクワから300km程南にあるボロネジという町（当時のソ連ではベスト10ぐらいの都市であった）で仕事をしていました。我々外人は一カ所に集められ20階建てのアパートに住んでいました。土日は何もすることがないので、現地の会社の方々が色々とアイデアを懲らしたハイキング、茸狩り、水泳、小旅行などを企画してくれました。その中で今も強く印象に残っているのが「一杯の牛乳」でした。

内田さん、明日美味しい牛乳を飲みに行きましょう。新鮮な食べ物を求めて2週間に1回1泊2日のモスクワのホテルめぐりをしていた私にとって願ってもないことでした。当然自転車です。せいぜい30分程度の郊外で美味しい牛乳が飲めると喜び勇んでついて行きました。まず20分ほど自転車に乗って川の畔まで行きました。ここで美味しい牛乳が飲めると思いきや、次は4人乗りのカヌーに乗り換え30分程川を上りました。ここでも美味しい牛乳にはお目にかかれず、更に自転車に乗り換え農道をど

ンドン進んで行きました。やがて白樺林に突入り、道なき道をどんどん進んでいきました。もう私はついて行くのが精一杯となり、美味しい牛乳のことはすっかり忘れていました。とにかく林の中ですから先頭のロシア人について行くしか有りません。やっと白樺林を抜け出て一軒の農家にたどり着きました。金属函に入った美味しい牛乳をコップで3杯飲んで、復路又2時間をかけてアパートに戻ったというお話です。

その前年、ソ連のアフガン侵攻に抗議してモスクワ五輪をボイコットした日本（人）にとってソ連と言う国の印象が非常に悪く、そんな中でもこの様に親切なロシア人が国民の大多数を占めていたことを嬉しく思ったものである。